

市制 80 周年記念まちづくりシンポジウム

NEW OLD KAMAKURA ～鎌倉、伝統を守るため、革新に挑む～
(市制 100 年に向けて これまでとこれからの鎌倉)

日時：令和 2 年 1 月 25 日 (土)

会場：建長寺応真閣

司会：フリーアナウンサー 若林 理紗

第 1 部 市長挨拶・プレゼンテーション・基調講演

○鎌倉市制 80 周年を迎えるにあたり、鎌倉市のまちづくりについて、これまでの 80 年を振り返り、市制 100 周年に向けて、古都鎌倉を継承しつつ、未来の鎌倉市のまちづくりの課題・展望等について、市民も交えたシンポジウムにより方向性を共有し、これからの 20 年の取り組みの具体化につなげることを目的として、「まちづくりシンポジウム」を開催しました。



生花協力：日比谷花壇大船フラワーセンター



募集定員 200 名に対して、650 名を超える方から応募がありました。

鎌倉市長 松尾 崇 「伝統を守るため、革新に挑むまち、かまくら」

【概要】

- 鎌倉市の環境保全は、御谷騒動、三大緑地の保全など、多くの市民を巻き込んできて、現在も多くの市民団体が鎌倉の未来をつくるために多くの活動をしている。
- 時代を作ってきた先人は一歩先を見て、革新を起こしてきたので、それに学びながら未来をつくりたい。
- 鎌倉市は、人口減少、税収減に立ち向かう必要がある。
- スマートシティ、デジタル革新など、最新のテクノロジーをツールとして使っていくことで、しっかりと人々の生活を豊かにしていきたい。
- 深沢地域をはじめ、三つの拠点でそれぞれの地域特性に応じたまちをつくっていきたい。
- 行政だけではなく、あらゆる立場の人が一緒にやることで革新が起こっていく。
- 車中心の社会から、人中心のウォークブルなまちにしていきたいと考えている。
- このシンポジウムが、大きく前進させる機会になることを期待している。



■松尾崇市長による挨拶・プレゼンテーション

基調講演 建築家・東京大学教授 隈 研吾 「これまでとこれからの鎌倉」

建築家・東京大学教授の隈研吾氏から、ご自身の携わった建築作品を例に交えながら、主に次のような視点で講演がされました。

- 20世紀のまちは、大きいこと、高いことが新しい・かっこいいとされてきた。
- 現在は逆で、低い、地面にくっついているものがかっこいい時代である。
- 鎌倉は、伝統と自然などと関係が深い、新しいまちをめざす絶好の場所である。
- 最先端のテクノロジーで低くて小さいものの建築が実現可能になり、鎌倉は最適な場所だと思う。
- 鎌倉には、中世の文化の良さがある。市長が言ったNEW OLDのまちができると注目があつまるのではないかと。



■隈研吾氏による基調講演

第2部 パネルディスカッション「いかに伝統を守り、未来へと変化するまちにするか」

コーディネーター	鎌倉市深沢地域整備事業推進参与	加治慶光
パネリスト	建築家・東京大学教授	隈 研吾 氏
	慶応義塾大学環境情報学部教授	中澤 仁 氏
	日本大学理工学部准教授	押田佳子 氏
	内閣府地方創生推進事務局審議官	村上敬亮 氏



■パネリストによる話題提供(コーディネーター)



■加治慶光参与



■司会の若林理紗アナウンサー



■会場の様子

コーディネーター：鎌倉市深沢地域整備事業推進参与 加治慶光（以下「加治」）

第三部に向かうための論点整理をしていくため、伝統を守りながら新しいまちに変化することの難しさについての考えを聞かせてほしい。

隈研吾氏（以下「隈」）

- 伝統のものを現代にあてはめるためには、対立ではなく一緒につくっていくとスムーズにできることを、フランスのプロジェクトで実感した。
- 対立ではなく、一緒に考えようというスタンスが大事と考える。
- 意識を変換すれば楽しく新しいまちがつかれる。

中澤仁氏（以下「中澤」）

- 自身が専門とするコンピュータのプログラムは簡単にできるが、まちづくりは難しい。かたちは作れるが人が住んでいるのでヒトが変わらないことには、まち全体が変わらない。
- 新しいまちをつくる時に人の行動、心を変えることが難しい。

押田佳子氏（以下「押田」）

- 自然があるから人が集まる。魅力があるからさらに集まって観光地になる。
- 自然はそれほど変わっておらず、変わったのは行動のしかたである。
- 段葛周辺の自然はそれほど変わっていないのに交通手段などが変わった。
- 鎌倉が魅力的でありつづけるためにはオーバーツーリズムに対応して、人を集めながら、快適に暮らすことが課題と考える。

村上敬亮氏（以下「村上」）

- まちづくりのためにいろんな分野の規制緩和が必要などところがある。
- 人口が増える時代から、減る時代となり、今までと同じ競争ルールではだめで、これからはモノを共有する文化になる。
- 共有するときは誰がいくら出すのか、ということになり、そこにコミットする人たちに大義名分が必要となる。
- 大義名分が無いところにはフェアネスという概念は発生しない。
- 歴史・自然。何を共有すると豊かな気持ちと空間が生まれるのか。
- スーパーシティを通じて考えてほしい。



■左から隈研吾氏、中澤仁氏、押田佳子氏、村上敬亮氏

加治

最近思っている課題、興味をもっていること。まちづくりにかける思いについて聞かせてほしい。

隈

- 市長のプレゼンでウォークアブルが面白いと思った。
- スライドで紹介したポートランドは街区が小さい特徴がある。街区が平均40メートル四方で、ニューヨークはその倍であり道が太い。
- ポートランドには細くて気持ちがいい道が40メートルごとにある。
- ブラジリアは100メートル、京都は120メートルで、日本人には大きすぎて、割って、小さなスケールの歩きやすいまちができています。
- 歩くということは、環境、健康に関係する。歩くことを起点にすることは、鎌倉のようなスケールのまちには良いのではないかと。

中澤

- ウェルビーイングコンピューティングという分野があり、とにかく、何らかで人に良い作用のものとなるようなものである。
- 現在、藤沢市のスマート化に取り組んでおり、まちの中から細かく情報を集めている。情報を細かくしていくと、今までわかってなかったようなこともわかってくる。
- 環境のことだけに関わらず、あらゆる分野で細かく細かく情報を集めるということが、どうやったら鎌倉で実現できるかということに興味を持っている。

押田

- オーバーツーリズムの定義はないが、世界の観光都市と比較して、人口に対して観光客が多い。
- 小町通りは混んでいるときは歩けない。混雑は、ピークタイムの総武線と同じくらいである。
- 観光では、人が多くなると幸せというが、交流が欠けてしまうと幸せな観光でなくなってしまう。
- 交流人口が多くなると観光では幸せだがオーバーツーリズムになると弊害になる。
- 歩く観光を交流を交えてをどこまで広げられるかと思っている。

村上

- 数千人にアンケートをして、困っていることを尋ねたら、年収に関わらず、「お金が足りない」との回答が多かった。
- 多分、「何でこんなことしないといけないのか」という我慢をしている中で、自分の求める課題をお金で解決しようとすると、少し足りないということだと思える。
- いかに自然体に、いかに困っていることをさらけ出すかで、まちづくりがうまく行くのではないかとというのが最近の関心である。

加治

ひとつずつ、市民の皆様へのメッセージを。

隈

- 鎌倉は、新しいまちづくりのモデルになるということは、新しいブランドになり得る。
- ブランドはオーバーツーリズムと裏腹の問題となるので、微妙なかじ取りが求められることになるので皆さんと一緒に考えていけたらと思う。

中澤

- まちはモノだけではなく、人を含むものなので、未来へ変化するというはみんながつくるものである。
- そのためにいろんな技術が使える。ボトムアップなまちづくりがどういう風に行けるかを考えていきたい。

押田

- 観光には「住んでよし、行ってよし。」という言葉がある。自身も去年は鎌倉に62回来た。
- 皆さんが住んで良いまちなので、自分も好きなのだと思う。好きな街を維持できるようにしていきたい。

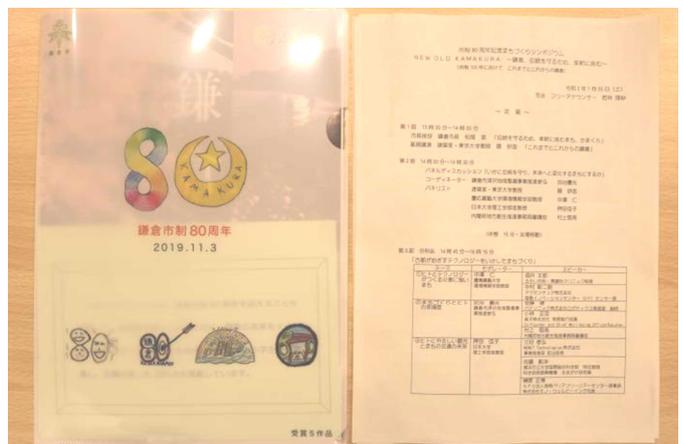
村上

- 日本のテクノロジーがまちのSDGsにチャレンジする。様々な困った事をまとめてスーパーシティで解決したい。
- まずはスーパーシティを知ってほしい。

加治

様々なキーワードが出た。

「歴史を忘れない」「人の心を変えていこう」「対立概念を対立ととらえない」「フェアネス」「スマートシティ、スーパーシティ」「ウェルネス」「交流人口」「課題を我慢しない」
これらを第三部で掘り下げを行いたい。



■会場入口と配布資料（資料の配布は市制80周年記念クリアファイルを活用）

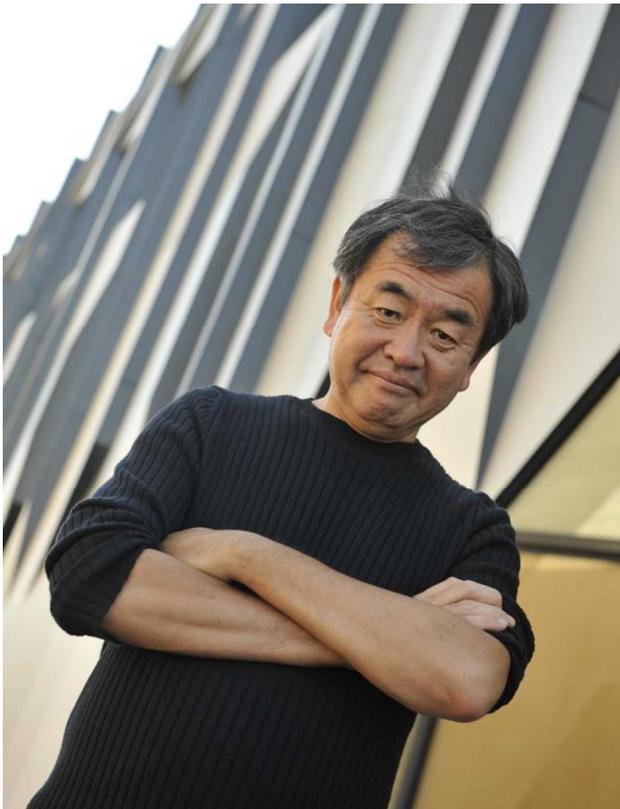


Photo © J. C. Carbonne

基調講演講師

隈 研吾(くま けんご)

建築家・東京大学教授

東京大学建築学科大学院を修了後、コロンビア大学客員研究員を経て、1990年に隈研吾建築都市設計事務所を設立。これまで国内外にて建築の設計を行い、日本建築学会賞ほか、国内外で様々な賞を受賞。東京オリンピック・パラリンピックの会場となる「国立競技場」の設計に携わった他、国内外に作品多数。

横浜で生まれ、中学・高校時代を本市の栄光学園で過ごした。2017年春にオープンした、同校の新校舎の設計監修も行なっている。2019年11月から鎌倉市都市政策専門員。

村上 敬亮(むらかみ けいすけ)

内閣府地方創生推進事務局審議官



1990年、通産省入省。著作権条約交渉、e-Japan戦略等IT政策に関わった後、クールジャパンの立ち上げ、地球温暖化防止条約交渉、再生可能エネルギー政策などに従事。2014年、地方創生業務

に着任。2017年より国家戦略特区担当。

中澤 仁(なかざわ じん)

慶應義塾大学環境情報学部教授、同政策・メディア研究科委員



2003年に慶應義塾大学博士号(政策・メディア)を取得し、ジョージア工科大学客員研究員を経て現職。

2017年にはSFC研究所の産官学共同研究組織として「地域IoTと情報力研究コンソーシアム」を

立上げ、センシング技術やディープラーニング、スマートモビリティなど、情報力を活用したスマートシティ構築の研究を行っており、2019年から鎌倉市も参画している。2019年12月、深沢地域整備事業技術アドバイザーに。

押田 佳子(おしだ けいこ)

日本大学理工学部准教授/ 博士(農学・工学)



大阪府立大学大学院農学生命科学研究科農学環境科学専攻博士後期課程修了後、日本大学理工学部助教(社会交通工学科・まちづくり工学科)等を経て、2015年から現職。

ランドスケープエコロジーと観

光まちづくりを専門とする。

2015年～2016年 鎌倉市観光基本計画推進委員会委員(副委員長)、2018年～鎌倉市緑政審議会委員(会長職務代理)

加治 慶光(かじ よしみつ)

鎌倉市深沢地域整備事業推進参与



グロービス経営大学院教授

民間企業における事業戦略策定や実施、ブランディング、マーケティングに関わる。内閣官房の参事官として政府海外広報にも携わる。